

諸葛亮と籌筆驛

— 英雄傳説とその舞臺 —

竹内眞彦

一 問題意識

『太平記』¹⁾ 卷二十一「義助朝臣病死事付頼軍事」の段、南朝の將、脇屋刑部卿義助がにわか病を得て頓死する際に、次のような記述がある。

相順フ官軍共、始皇沙丘ニ崩ジテ、漢・楚氣ニ乗ル事ヲ悲ミ、孔明籌筆驛ニ死シテ、吳・魏使リヲ得シ事ヲ愁シガ如ク、……〔後略〕

義助が歿したことで敵方が利を得るであろうことを、始皇帝と諸葛亮の死の状況になぞらえているのである。

始皇帝の崩じた地については、『史記』²⁾ 秦始皇本紀が次のように二云う。

七月丙寅、始皇崩於沙丘平臺。

(七月丙寅、始皇 沙丘平臺に崩す。)

『太平記』の記述は、ひとまず『史記』に則ったものであるとしてよいであろう。問題は、諸葛亮の歿した地についてである。

諸葛亮について、僅かでも知っている者(例えば『三國志演義』の

讀者でもよい)に、彼の歿した地はどこかと問えば、ほとんどが「五丈原」と答えるであろう。事實、岩波書店日本古典文學大系『太平記』の注釋者は、「籌筆驛」という語に、次のような注を施す。

四川省廣元縣の北。諸葛亮が軍を駐めて謀をめぐらした地。孔明の死んだ地は五丈原(四川省鳳翔縣)であろうから、ここはちがう(蜀志、諸葛亮傳³⁾)。

この内容の當否、及びその原據はともかく、ここでは、この注が、「諸葛亮は五丈原で歿した」との認識を、我々が共有しているということの象徴となつてゐることを指摘しておきたい。

翻つて、「孔明籌筆驛ニ死シテ」という記述について考えてみよう。これを(史實とは異なる)誤りとして退けるのは容易だが、その立場は棚上げしておく。本稿は史實を追求するのが目的ではない。

『太平記』の記述の背後には、從來、餘り言及されることのなかつた性質を持つ諸葛亮の傳説が存在するように思われる。そこで、諸葛亮と籌筆驛の關係について檢證し、さらには、それを範例として英雄傳説と地名の繋がりについて述べてみたい。

一一 籌筆驛の所在

諸葛亮の事績を述べていることから、對置されている始皇帝についての記述が（經緯はともかく）漢籍を原據とすると思われることも、『太平記』に現れる「籌筆驛」についての記述の濫觴は中國に求めるべきであろう。

問題となる「籌筆驛」なる地名であるが、正史には現れない。少なくとも『三國志』（裴松之注を含む）、『晉書』などには見えない。また、管見の限り、南北朝以前に、この「籌筆驛」について言及した資料もないようである。そもそも、その名の由来（後述）からも、諸葛亮の死以前から「籌筆驛」が存在していた可能性はほとんどないのだが、その死以後、しばらくの間をおいても、文献資料に「籌筆驛」の名は現れないとしてよいと思われる。

一方、それが「實在」した地名であることも、また確かである。籌筆驛の地理的な状況が把握できる早期の資料としては、宋代の地理誌が挙げられる。王象之編『輿地紀勝』^③卷一百八十四「利州路」利州・景物下に二云う。

籌筆驛。在綿谷縣。去州北九十九里。舊傳、諸葛武侯出師嘗駐此。唐人詩最多。

（籌筆驛。綿谷縣に在り。州を去ること北九十九里なり。舊傳にいう、諸葛武侯 出師して嘗て此に駐む。唐人の詩 最も多し。）
續いて石曼卿（延年）の「籌筆驛」詩が引用される。この記述に明らかな通り、『輿地紀勝』に先行する「籌筆驛」に關する敘述として唐詩が挙げられるのだが、それについてはひとまず措く。『輿地紀勝』には嘉定辛巳（十四年、一二二二）孟夏の王象之の自序が附されてお

り、成書年次もこのあたりと比定して大過ないであろう。なお、『輿地紀勝』の「舊傳」が何を指すかは未詳である。

ここで、籌筆驛が何處にあったのかを明確にしておこう。『舊唐書』に據れば、綿谷縣が置かれたのは隋代のことである。『舊唐書』地理志・山南道・山南西道・利州下に云う。

綿谷 漢葭萌縣地、蜀爲漢壽縣。晉改晉壽縣、又分晉壽置興安縣。隋改興安爲綿谷。……〔後略〕

（綿谷 漢の葭萌縣の地なり、蜀 漢壽縣と爲す。晉 晉壽縣と改め、又た晉壽を分かちて興安縣を置く。隋 興安を改め綿谷と爲す。……〔後略〕）

もとを辿れば、綿谷は葭萌と稱された地に屬していたわけである。そこで、『三國志』を鑑みるに、蜀書・諸葛亮傳に二云う。

建安十六年、益州牧劉璋遣法正迎先主、使擊張魯。亮與關羽鎮荊州。先主自葭萌還攻璋、亮與張飛・趙雲等率衆奔江、分定郡縣、與先主共圍成都。成都平、以亮爲軍師將軍、署左將軍府事。

（建安十六年、益州牧の劉璋 法正をして先主を迎えしめ、張魯を撃たしむ。亮 關羽と荊州に鎮す。先主 葭萌より還りて璋を攻め、亮 張飛・趙雲らと衆を率いて江を泝り、分けて郡縣を定め、先主と共に成都を圍む。成都の平らぐや、亮を以て軍師將軍と爲し、左將軍府事を署せしむ。）

荊州から蜀に入った劉備は、漢中に盤踞していた張魯を討たんと北上するが、葭萌で先を成都に向ける。このことから明らかな通り、葭萌は漢中から成都への中途に位置していたのである。

再び、籌筆驛についての地理的記述を検討する作業に戻る。祝穆『方輿勝覽』^④卷六十六「利州東路」利州・古蹟の條には、前掲の『輿

地紀勝』とほぼ同様の記述がある。ただし、『輿地紀勝』が「唐人の詩 最も多し」と言うにとどまり、具體的には一詩も引かない（石延年は宋人である）のに對し、『方輿勝覽』は杜牧・李義山（商隱）・羅隱・薛逢（加えて南宋の陸游）の詩を引く。『方輿勝覽』には嘉熙己亥（三年、一二三九）の呂午の序ならびに祝穆の自序があるから、成書年次は『輿地紀勝』より下ると推測され、ならば、前者が後者の記述を受け、「唐人詩」の具體例を補充した可能性もあろう。

以上の如く、南宋後期には「籌筆驛」が「實在」したことが確認できる。そして、いずれの場合も、諸葛亮と關連づけられている。更に言えば、籌筆驛を舞臺に、諸葛亮をめぐる英雄傳説が存在した可能性が指摘できよう。

まず、『輿地紀勝』（および『方輿勝覽』）の記述から、諸葛亮が「籌筆驛」に軍を駐めたこと、およびそれは「出師」すなわち北伐の開始の後であったことが確認できる。さらに、南宋代に成立した類書『玉海』卷一百七十二「邸驛」に云う。

漢籌筆驛

在蜀路。諸葛孔明亮籌畫此。山水最秀。殷潛之・杜牧・石延年有詩。

漢籌筆驛

蜀路に在り。諸葛孔明亮 此に籌畫す。山水 最も秀づ。殷潛之・杜牧・石延年に詩有り。）

この記述を信じるならば、諸葛亮が籌畫（はかりごとをめぐらす）したことが、籌筆驛の名の由来となっているわけである。つまり、諸葛亮の故事にちなんでの命名であり、それ以前から「籌筆驛」という地名が存したわけではない。一種の觀光地というべき場所であって、正

諸葛亮と籌筆驛

史などに現れないのは、むしろ、當然のことであろう。

以上のことより、遅くとも南宋代には、「北伐を果たすために出師した諸葛亮が、籌筆驛に軍を駐めて策を練った」という諸葛亮故事が存していたと推測される。そして、『輿地紀勝』が指摘する如く、多くの唐人が、この「籌筆驛」を材として作詩しており、當時、此地が廣く知られていたことを示している。

三 「籌筆驛」詩

管見の限り、殷潛之の「題籌筆驛」詩、およびそれに和した杜牧の「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」詩が、籌筆驛を材とする最も早い例である。これ以前に「籌筆驛」が見出せないとなれば、籌筆驛が注目されたのは、諸葛亮の死（建興十二年、二三四）の後、六百年近くの歳月を経たから、ということになる。

この二首を除くと、唐人の作としては、李商隱に「籌筆驛」、薛逢に「題籌筆驛」、薛能に「籌筆驛」、羅隱に「籌筆驛」と題する詩があり、いずれも諸葛亮を主題とする。また、直截に諸葛亮を主題とするものではないが、唐彦謙「興元沈氏莊」に「江は遶る 武侯籌筆の地」（七律第五句）という句があり、ここでも諸葛亮（武侯）と籌筆（驛）は明確に結びついている。少なくとも七首の唐詩が、諸葛亮と籌筆驛の關係について言及しているわけである（以下、このような籌筆驛をめぐる詩を、假に「籌筆驛」詩と稱する）。

それでは、この事實を如何に位置づけるべきであろうか。果たして、「籌筆驛」詩の数は多とすべきか、寡とすべきか。

當然の事ながら、「籌筆驛」詩のみを見ていたのでは、この疑問について結論を出すことはできない。對象範圍を擴大して考察を行う。

角谷聰の調査に據れば、諸葛亮の登場する唐詩は八十二首が存し、これは三國時代の人物としては王粲に次ぐ數であると言ふ。また、王瑞功主編『諸葛亮研究集成』には、五十二首の唐詩を收める。總數に懸隔があるが、これは前者が諸葛亮の登場する詩を區別無く數えるのに對し、後者が諸葛亮を主題とした詩に焦點を當てるためである。そこで、兩者をもとに、筆者が數え直したところ、『全唐詩』中、諸葛亮の名が現れる、あるいは諸葛亮を詠む詩は計九十二首が確認できる。少なからぬ詩が諸葛亮を詠み込んでゐるのである。

この中で、諸葛亮に因んだ地名（景物を含む）が、詩題か詩句に現れるものは三十首ある。さらに、内譯を見ると、「南陽」が最も多く十首、「籌筆驛」が七首でこれに次ぎ、以下「永安」「八陣圖」が三首、「劍閣」「渭（水）」「瀘水」「五丈原」が二首と續く。「籌筆驛」詩の數は多としてよい。

また、「籌筆驛」の語が、ほとんどの場合、詩題に用いられていることは特徴といふべきであろう。たとえば、前掲中、最多の用例を確認できる「南陽」は、詩題に現れる例が三例、詩句に現れる例が七例である。これに對し、「籌筆驛」を詩題に含む詩は六首存するが、詩句に用いられるのは二首にとどまる（ただし、これは詩句における「籌筆（驛）」の例が少ないことを意味しない。詩句に現れる地名は、「南陽」を除けば、「永安」が三首を數えるのが最多なのである。「籌筆驛」の現れ方は、ある種の偏りを持つてゐるわけである。

さて、前掲した諸葛亮をめぐる唐詩に現れる地名の中、「南陽」が諸葛亮出廬前後を、「永安」が劉備が臨終に際して諸葛亮に後事を託す所謂「先主託孤」の故事を象徴するのは指摘するまでもないであろう。それでは、「籌筆驛」の場合は如何であろうか。

詩の内容を検討することで、この問題は解決するであろう。「籌筆驛」詩を通覽したとき、前節で確認した「諸葛亮が出師した（すなわち北伐を開始した）際に、籌筆驛に軍を駐め策を練った」という認識は、ほぼ共有されてゐる。試みに、殷潛之「題籌筆驛」冒頭八句を掲げておく。

江東矜割據 江東 割據を矜り

鄴下奪孤嫠 鄴下 孤嫠を奪う

霸略非匡漢 霸略 漢を匡くるに非ず

宏圖欲佐誰 宏圖 誰を佐けんと欲す

奏書辭後主 書を奏して後主を辭し

仗劍出全師 劍に仗りて全師を出だす

重襲襲斜路 重ねて襲う 襲斜の路

懸關反正旗 懸關はらかに開く 反正の旗

第五・六句が出師表を奉り出陣したことを詠い、第七・八句がその後の北伐を云うことは明らかであろう。

また、薛逢「題籌筆驛」第三句は「出師表上留遺懇（出師表上遺懇を留め）」と云い、羅隱「籌筆驛」に「北征東討 良籌を盡くし」とある。「籌筆驛」が諸葛亮の出師・北伐と結びつけられる傾向の存することの證左とならう。

しかし、これだけでは後代の『輿地紀勝』などに記されることと大差ない。注目すべきは、杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」で詠われる内容である。まず、冒頭八句を引く。

三吳裂婺女 三吳 婺女を裂き

九錫獄孤兒 九錫 孤兒を獄す

霸王業未半 霸王 業未だ半ばならず

本朝心是誰 本朝心 是れ誰そ

永安宮受詔 永安宮に受詔し

籌筆驛沈思 籌筆驛に沈思す

畫地乾坤在 畫地 乾坤 在り

濡毫勝負知 濡毫 勝負 知る

冒頭四句は、和詩にふさわしく殷潛之「題籌筆驛」を踏まえた表現となつてゐる。第五句は諸葛亮が劉備の遺詔を受けたことを云い、そして「籌筆驛」にて「沈思」するわけである。明示はされないが、出師して北伐へ至る途上のことだと解することは可能であろう。

さて、詩の後半部に當たる第十六句から第二十四句までを引こう。

襲中秋鼓角 襲中 秋鼓角

渭曲晚旌旗 渭曲 晚旌旗

仗義懸無敵 仗義 懸かに敵無く

鳴攻故有辭 鳴攻 故より辭有り

若非天奪去 若し天の奪い去るに非ざれば

豈復慮能支 豈に復た慮 能く支えんや

子夜星纒落 子夜 星 纒かに落ち

鴻毛鼎便移 鴻毛 鼎 便ち移る

情景は北伐へと進み、魏（おそらくは司馬懿）と渭水にて對峙したことを詠う。注目すべきは引用第七句である。『三國志』蜀書・諸葛亮傳裴松之注所引『晉陽秋』に云う。

星赤而芒角、自東北西南流、投于亮營、三投再還、往大還小。俄而亮卒。

（星の赤くして芒角ある有り、東北より西南に流れ、亮の營に投ずるに、三たび投じて再び還り、往くは大にして還るは小なり。

諸葛亮と籌筆驛

俄かにして亮卒す。）

「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」詩の「子夜星纒落」が、この故事を踏まえているのは明らかであろう。「籌筆驛」を題する詩中で、諸葛亮の死が扱われているのである。

この事實が示唆するところは重大であろう。無論、作者の杜牧は「籌筆驛沈思」の語が示す如く、籌筆驛が、多くの場合、「諸葛亮が出師して計略を練つた地」として認識されていたことは承知したはずである。しかし、この詩はそのような限定から逸脱して、諸葛亮の死をも包括する。換言すれば、籌筆驛が「北伐」を中核とする諸葛亮の後半生を象徴する地名となっているのである。

四 五丈原と籌筆驛

唐詩において、籌筆驛と對蹠的な様相を示している地名として五丈原が擧げられる。

冒頭に指摘したように、現在、少しでも三國志故事を知っている者にとつて、五丈原は「諸葛亮の陣歿した地」と認識されている。具體的にテキストによって確認しておこう。

まず、（やや粗雑な物言いだが）今日における三國志故事のアー・プリオリなイメージを作り出していると言ふべき『三國志演義』（以下、『演義』と略稱）を確認する。『演義』卷八第五則「定三分亮出茅廬」、諸葛亮が出廬する際に「後人有詩爲證」として、以下のような詩が引かれる。

身未升騰思退歩 身 未だ升騰せずして退歩を思い
功成不忘去時言 功成りて忘れず 去時の言
只因先主叮嚀後 只因 先主 叮嚀の後

星落秋風五丈原 星落つ 秋風五丈原

『演義』では、諸葛亮が出陣する際にその死をも視野に入れるわけだが、その諸葛亮の死する地は「秋風五丈原」だと明瞭に詠われる。

そして、實際に諸葛亮の死を描く卷二十一第七則は、直截に「孔明秋風五丈原」と題される。

本文も閲しておこう。例えば、以下のような箇所がある。延命の祈禱が失敗し自らの命が旦夕に迫ったことを悟った諸葛亮は、後主(劉禪)に上表を行う。後主はそれを受けて李福を使者として派遣する。後主急遣尙書僕射李福、星夜徑到五丈原、入見孔明問安。

(後主はあわてて尙書僕射の李福を晝夜兼行で五丈原に向かわせ、孔明に對面させてその容態を尋ねさせます。)

この後、諸葛亮が死去する。天文から「諸葛亮死す」の報を讀みとつた司馬懿は、すぐさま大軍を起こそうとするが、諸葛亮が「六丁六甲遁法」をよくすることを思い出す(卷二十一第八則「死諸葛走生仲達」)。

遂令夏侯霸暗引輕騎、望五丈原山僻哨探消息去了。

(そこで夏侯霸に命じ、ひそかに輕騎兵を率いて五丈原の山あいで動靜を探らせました。)

諸葛亮が布陣していた處、すなわち彼が陣歿したのが五丈原であることは疑いを容れない。

また、『演義』に先行する網羅的三國故事である『三國志平話』(以下、『平話』と略稱) 卷下は、諸葛亮の死の間際に以下のような挿話を記す。

最後の北伐に赴いた諸葛亮は司馬懿の軍を散々に破るが、その後、前線である街亭を離れようとする。それは、自らの兇運を天文から察知した故であった。ある村落に辿り着いた諸葛亮は、住民と思しき老

婆にその地名を尋ねる。老婆は、祁山岐州鳳翔府であると答え、さらには諸葛亮の最期の迫っていることを仄めかす。そこで、諸葛亮が西に見える山の名を尋ねると、老婆は「秋風五丈原」と答えた後、姿が見えなくなった。

『演義』『平話』ともに五丈原に「秋風」を冠することから、後述する胡曾の詩との影響關係について考察すべきであろうが、ここでは措く。ともかく、元明代に現れた兩者は、ともに諸葛亮の死と五丈原を明確に結びつけるのであり、その認識は今日にまで繼承されているとしてよいであろう。五丈原は、諸葛亮臨終の地として、三國志故事の受容者に深く記憶されているのである。

ところが、唐詩においては、後世とは些か状況に懸隔があるようである。そもそも諸葛亮と五丈原とが關連づけられて詠まれることが多い。前述の如く、溫庭筠「過五丈原」および胡曾「五丈原」の二首にとどまっている(「籌筆驛」詩と同様に、この二首を假に「五丈原」詩と稱する)。

詩の内容も確認しておこう。ここでは、胡曾の「五丈原」を引く。

蜀相西驅十萬來 蜀相 西のかた十萬を驅し來たり

秋風原下久裴回 秋風 原下 久しく裴回す

長星不爲英雄住 長星 英雄が爲に住まらず

半夜流光落九垓 半夜 流光 九垓に落つ

諸葛亮臨終を詠んだものであるのは一目瞭然であるが、注目すべき二点を擧げておきたい。一つは、起句が「西驅十萬來」と、諸葛亮の北伐から詠い起こされていること、もう一つは轉結句で「長星」「落九垓」と詠われることである。この表現が、先に引用した『三國志』蜀書・諸葛亮傳裴注所引『晉陽秋』を踏まえていることは多言を要すま

い。すなわち、胡曾の「五丈原」の内容は、北伐から陣歿するまでの諸葛亮故事を詠むという点で、前節で言及した杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」と一致するのである。附言しておけば、溫庭筠「過五丈原」も、その第一句は「鐵馬雲雕久絕塵（鐵馬 雲雕 久しく塵を絶ち）」と起こされ、第四句には「夜半妖星照滑濱（夜半 妖星 滑濱を照らす）」とある。二つの「五丈原」詩は類似した主題を詠み込むのであるが、杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」に明らかような、唐詩には、五丈原以外にも諸葛亮晩年という主題を扱う、「籌筆驛」が存在する。すなわち、五丈原は後世ほど絶対的な位置を獲得しているわけではない。

無論、「籌筆驛」詩すべてが諸葛亮臨終を扱うわけではない一方で、二首の「五丈原」詩はともにその故事に言及するわけであり、また、杜牧の詩にしても籌筆驛を諸葛亮臨終の地とするわけではない。つまり、籌筆驛が五丈原に、完全にとって代わる位置を占めていたわけではない。しかし、籌筆驛が、諸葛亮の晩年の事績を、強く意識させる地名であったとは言い得るであろう。やや下って宋代の詩を閲したとき、その傾向は一層顯著となる。

北宋の張方平「籌筆驛」に云う。

本規一舉定乾坤

本規 一舉 乾坤を定めんとするも

遽見長星墜壘門

遽かに見ゆ 長星の壘門に墜つるを

公在必無生仲達

公 在らば必ず生ける仲達無く

師昭何業得中原

師昭 何の業ありて中原を得んや

この詩は七絶である。起句のみは、北伐の計策を練ったとされる籌筆驛の名に相應しい。しかし、承句以降の展開は明らかに諸葛亮の死が中心に据えられるのであり、結果、この詩の主題は疑いなく諸葛亮臨

終を詠むことにあると言わざるを得まい。別言すれば、「籌筆驛」という詩題でもって、諸葛亮臨終を詠うことが行われていたわけである。しかも、このような詩は一首にとどまらない。石延年「籌筆驛」に「遽見墮長星（遽かに見ゆ 長星の墮つるを）」とあり、李新「籌筆驛」に「滑橋水急妖星落（滑橋 水 急にして妖星 落つ）」と見える。また、單純に「題籌筆驛」と題される詩を数えると、六首が確認できる。

翻って「五丈原」であるが、管見の限り、宋詩で四例を確認することができる。唐詩よりは増えているとは言え、籌筆驛には及ばない。籌筆驛が史書には見えない地名であり、「五丈原」は保留をつける必要があるとは言え、諸葛亮臨終に際して現れる地名であることを考え合わせると、これは極めて興味深い。「虚構」の地名と「史實」の地名との認知のされ方が、控えめに言っても、拮抗しているのである。

何故にこのような現象が起こったのであろうか。様々な要因が考えられるが、一つには、雙方の地理的状況が關係している可能性が指摘できる。籌筆驛は、前述の如く宋代の地理書に「驛」として記されており、恐らく四川における主要交通網の中の一地点であったのであろう。當然、人や物資の往來は盛んであったはずであり、それゆえ、籌筆驛の名が諸葛亮に因んだものであることも廣く知られていたのであろう。更には言え、籌筆驛には、諸葛亮に因んだ景物も存在した。例えば、『輿地紀勝』からの抜粹である『輿地碑記目』卷四「利州碑記」は、李義山（李商隱）碑の存在を記し、「在籌筆驛西有碑。近今兵火不存（籌筆驛の西に在りて碑有り。近今 兵火にて存せず）」と注する。また南宋・陸游の「籌筆驛」詩には、「有武侯祠堂（武侯の祠堂有り）」という陸游の自注がある。交通の要所であるがゆえに往來が増え、そ

れゆえ名が知られ、名が知られることで觀光地化してゆくという構圖が看取できよう。

一方、五丈原が如何なる状況であつたかはよく判らない。五丈原の地理的狀況を記す資料としては、早く『水經注』⁽²⁾があり、その卷十七「渭水」は「渭水又東徑五丈原北（渭水 又た東し五丈原の北を徑）」と記す。ただし、この記述からは五丈原への交通がどうなつていたかは推し量れず、後世の資料も精々五丈原の地理的位置を記すにとどまる。また、五丈原の景物については、金の郝居中に「題五丈原武侯廟一首」⁽³⁾があり、廟の存在が確認できるのだが、その頌聯に云う。

壞壁丹青仍白羽 壞壁 丹青 仍ほ白羽
斷碑文字只蒼苔 斷碑 文字 只だ蒼苔

明らかに廟の寂れたさまを詠うのであり、間接的にはあるが、五丈原が往來の少ない地であつたことを示唆する。さらに、前節で指摘した如く、唐詩に現れる狀況をも鑑みると、籌筆驛ほど交通の往來があつた可能性は低いであろう。

以上の議論は、次のようにまとめられるのではないか。すなわち、史書に現れるような權威ある故地（五丈原）であつても、地理的條件などにより廣く認識されるとは限らない。逆に、そのような權威を全く帯びない地（籌筆驛）であつても、地理的條件などに恵まれれば廣く人口に膾炙する可能性が出てくるのである。

五 歴史物語と地名

いまま少し、議論を押し進めてみたい。筆者が前節で五丈原に拘泥したのは、この地をめぐる、以下のようなテキストが存在するからである。

志云。武侯諸葛亮將蜀軍、曰北伐魏。魏明帝遣司馬仲達拒之。仲達・蜀軍於五丈原下營。即死地也。遂關城不出戰。武侯患之、居歲。夜有長星墜落於原、武侯病卒而歸。臨終爲□□儀曰、吾死之後、可以米七粒并水於口中。手把筆并兵書。心前安鏡。□下以土。明燈其頭。坐昇而歸。仲達占之云、未死。有百姓告云、武侯已死。仲達又占之云、未死。竟不敢診之。遂全軍歸蜀也。……〔後略〕

〔志に云う。武侯諸葛亮 蜀軍を將いて魏を北伐すと曰う。魏明帝 司馬仲達を遣りて之を拒がしむ。仲達・蜀軍 五丈原に下營す。即ち死地なり。遂に城を關して出戰せず。武侯 之を患い、居ること歳たり。夜 長星有りて原に墜落し、武侯 病卒して歸す。臨終に□□儀を爲して曰く（？）、吾が死の後、米七粒並びに水を口中に以てし。手に筆並びに兵書を把り、心前に鏡を安じ、□下に土を以てし、其の頭を明燈すべし、と。坐昇（？）して歸す。仲達 之を占いて云う、未だ死せず、と。百姓有りて告げて云う、武侯 已に死す、と。仲達 又た之を占いて云う、未だ死せず、と。竟に敢えて之を診せず。遂に全軍 蜀に歸る。……〕〔後略〕

これは、前節で引いた胡曾「五丈原」に施された陳蓋の注であり、所謂「死諸葛走生仲達（死せる諸葛 生ける仲達を走らす）」を語るものである。このテキストの濫觴は、しばしば指摘される通り、『三國志』蜀書・諸葛亮傳の裴注が引く習鑿齒の『漢晉春秋』に求められるであろう。しかし、これもしばしば指摘される通り、陳蓋注の内容は史實から乖離した荒唐無稽なものとなっている。そして、テキスト中に「仲達・蜀軍 五丈原に下營す。即ち死地なり」とあり、また、

そもそもこの注が「五丈原」に附されていることから、五丈原と極めて強固に結びついていることは論を俟たない。

ところで、このテキストの濫觴は『漢晉春秋』に求められると述べたが、これは史書を直截な典拠としていることを意味しない。周知の通り、『漢晉春秋』と「五丈原」陳蓋注の中間を繋ぐテキストが存在するのである。『四分律行事鈔批』『四分律行事鈔簡正記』などの佛典がそれであり、一讀すればこれらが「五丈原」陳蓋注と極めて類似した話柄を扱うことは明白である。

しかし、仔細に検討すると、佛典にはある要素が脱落していることに氣づく。すなわち、佛典には「五丈原」という地名は全く見えないのである(そもそも『漢晉春秋』にも五丈原は現れないから、佛典に「脱落」しているのではなく、「五丈原」陳蓋注に至って「附加」されているという言い方がより正確であろう)。

その一方で、三國志故事の後世の讀者たる我々は、特に意識はしないまでも「死諸葛走生仲達」の舞臺が五丈原であることを自明のものとしているように思われる。少なくとも、『演義』を讀む限りにおいては、そうとしか取りようがない。それゆえ、佛典における五丈原の不在を「脱落」と見てしまう。

實のところ、因果關係はむしろ逆であって、『演義』は胡曾「五丈原」および陳蓋注を據り所としているからこそ、「死諸葛走生仲達」の舞臺を五丈原に設定するのである。別言すれば、「死諸葛走生仲達」の故事は五丈原と不可分のものではなく、(地理的位置などによって限度はあるだろうが)別の地を舞臺としても何ら支障はない。

敷衍するならば、地名と故事、特に史書などの權威あるテキストに據らない故事(それを「傳説」と定義しても大過あるまい)との結び

つきというのは、存外、脆弱なものであるという可能性が指摘できる。地名と故事との結びつきが強固に見えるのは、全く受け手の先入観に據るのである。その傳説を記すテキストが如何に受容されるか、それによって地名と故事との結びつきはいとも容易く變容するであろう。假に、我々が胡曾の「五丈原」詩(及び陳蓋注)や「演義」を持たず、『漢晉春秋』や『四分律行事鈔批』のみが存するのであれば、五丈原を舞臺として「死諸葛走生仲達」故事が語られることはなかったのではないか。

六 「籌筆驛」その後——結語にかえて

前節の議論を逆説的に捉えるならば、「籌筆驛」が唐宋代に廣く人口に膾炙した形跡を確認できる以上、その籌筆驛を舞臺とする諸葛亮の「傳説」が存在した可能性は高いであろう。

現在、例えば胡曾「五丈原」の陳蓋注が記すような、籌筆驛を舞臺に語られる、まとまった形での(史書の記述から乖離した)「傳説」は確認できない。しかし、多くの「籌筆驛」詩が詠まれたことは、「傳説」が存在したことの状況證據になり得るであろう。

無論、籌筆驛以外にも、詩に詠み込まれた地名は數多くあり、そのすべてについて「傳説」が附隨する可能性は存在する。しかし、そのような一般的な可能性を超えて、籌筆驛には注目すべきであろう。何故ならば、籌筆驛が、史書に見えないばかりか、諸葛亮の死後、數百年を経ないと文獻に現れない「虚構」の地名だからである。しかも、第二・三節で指摘した如く、管見の限り、その初出は詩という文藝においてであり、事實の記録という性格を色濃くもつ地理書などから確認するには、更に時代を下らねばならない。

ある地名を認識するためには、實際にその地にゆくか、あるいはその地名について伝えるメディアからの情報を得なければならぬ。そして、後者の方が情報を傳達する力は遙かに強い。この一般論を籌筆驛に對して適用した場合、もっとも問題となるのは「メディアからの情報」とは何か、ということであろう。少なくとも、唐代以前において、七首の詩を除いては、籌筆驛のことを伝える文字テキストは存在しない。しかし、逆説的な物言いであるが、七首もの詩が作られるほど、籌筆驛の存在は人口に膾炙していた。ならば、口頭での傳達という非文字メディアに據る傳播を想定するのは當然であろう。そして、その際、諸葛亮が北伐に際して戰略を練ったという簡潔な形ばかりではなく、さらに物語化された風聞や傳説の存在をも想定するのは、それほど無理なことではあるまい。穿った見方をすれば、本稿冒頭に掲げた『太平記』の「孔明籌筆驛ニ死シテ」という記述は、そのような「傳説」の末裔であったのかも知れない。

しかし、現在では籌筆驛をめぐる「傳説」は、まったく失われた。その要因の一つとして、交通網の變化が豫想される。『大清一統志』卷二百九十八に云う。

籌筆古驛

舊志、今有朝天廢驛、在廣元縣北八十里、即古籌筆驛也。

(籌筆古驛)

舊志にいう、今朝天廢驛有り、廣元縣の北八十里に在り、即ち古籌筆驛なり、と。

「廢驛」という語から、交通網から外れ、驛としての機能を失ったことが察せられる。確かに交通網は變化しているのである。

しかし、交通網の變化は副次的な要因に過ぎないであろう。何故な

ら、『大清一統志』は廢驛となる以前に「籌筆」から「朝天」に名を改めたことも記しているからである。

「籌筆驛」の名が、遅くとも明代後期には改められたことは、別の資料からも確認できる。曹學佺『蜀中廣記』^⑧卷二十四「川北道・保寧府」一には、「神宣驛」が「古籌筆驛」であると見え、顧祖禹『讀史方輿紀要』^⑨卷六十八では、「即ち今の朝天驛なり」とする。未だ驛の機能を持っていた段階で、改名が行われたと思しいのである。

となると、「籌筆驛」をめぐる「傳説」が喪失したことには、別の要因を考えねばならない。まず考えるべきは、『三國志演義』の登場・流布であろう。諸葛亮を敘述することに力點を置く『演義』であるが、「籌筆驛」に對する言及は一切ない。

對して、「籌筆驛」と正反對の存在と言うべきが、「五丈原」である。第四節で確認したように、唐代においては、それほど言及されることなかった此地が、『演義』では盛んに強調されている。後世に對する『演義』の影響を考慮すれば、この意味するところは重大であろう。『演義』によって、「籌筆驛」は三國志故事の主流から脱落し、「五丈原」は主流に屬することになったのである。

それでは、何故、「演義」は「籌筆驛」を棄てたのか。あるいは、何故、「五丈原」を採ったのか。當然、このことを考察しなければならぬ。しかし、遺憾ながら、現在の筆者にはこの問題を検討する力量がない。今後の課題として、ひとまず擱筆したい。

注

(1) 『太平記』のテキストは、『日本古典文學大系』(岩波書店、一九六〇—六二年)に據る。これは流布本(慶長古活字本)を底本とする。なお、

『新編日本古典文學全集』（小學館、一九九四—一九八八年。これは天正本を底本とする）にも同様の記述が見える。また、『太平記』の古態本とされる西源院本（刀江書院、一九三六年排印本に據る）では、卷二十四「河合戦同比々海上之軍付備後頼軍事并千松原合戦事」に「孔明籌策ニ死テ吳魏便ヲ得コトヲ愁ウ」とある。西源院本校訂者の鷲尾順敬は、これを「籌筆」の誤記であるとす。

- (2) 以下、正史のテキストは百衲本廿四史に據る。
- (3) 日本古典文學大系『太平記』第二卷（岩波書店、一九六一年）三八一頁。

- (4) 『輿地紀勝』のテキストは、『宋代地理書四種之二／輿地紀勝』上下巻（文海出版社、一九六二年）に據る。

- (5) 『方輿勝覽』のテキストは『四庫全書』所収のものに據る。

- (6) テキストは、『四庫全書』所収のものに據る。

- (7) 籌筆驛が觀光地としての性質を帯びていたことは、濱田晉一「歴代『詠諸葛亮詩』試論」（佛教大學中國言語文化研究会『中國言語文化研究』第三號「二〇〇三年七月」）がとくに指摘する。

- (8) 以下、唐詩については便宜的に『全唐詩』の巻数を示す。殷潛之の「題籌筆驛」は『全唐詩』卷五百四十六所収。

- (9) 『全唐詩』卷五百二十三。

- (10) 杜牧の生卒年（八〇三—八五二）からの想定である。なお、陸暢に「籌筆店江亭」（『全唐詩』卷四百七十八）という詩があり、これは杜牧と同時代か、やや遡る例となる。しかし、「籌筆店」と「籌筆驛」が同じものであるかが判らず、詩中で諸葛亮は意識されていないため、ひとまず除外する。

- (11) 以下、『全唐詩』の巻数を示す。李商隱「籌筆驛」（卷五百三十九）、薛逢「題籌筆驛」（卷五百四十八）、薛能「籌筆驛」（卷五百六十七）、羅隱「籌筆驛」（卷六百五十七）。

諸葛亮と籌筆驛

- (12) 『全唐詩』卷六百七十二。

- (13) 角谷聰「『三國時代物語』の形成——『全唐詩』における三國時代の人物——」（廣島中國學學會『中國學研究論集』第五號「二〇〇〇年四月」五九—八〇頁）参照。

- (14) 王瑞功主編『諸葛亮研究集成』（嶽麓書社、一九九七年）下巻、八九—九三頁参照。

- (15) ただし、「中原」「蜀」など広い範囲を指す地名は除外した。以下、『全唐詩』における諸葛亮と地名を結びつける詩を列挙する（括弧内は巻數）。なお、一首に複数の地名が出る場合は、それぞれの地名について詩題を掲げた。

【南陽】

李白「讀諸葛武侯傳書懷贈長安崔少府叔封昆季」（一六八）、杜甫「武侯廟」（二二九）、任華「寄杜拾遺」（二六一）、許渾「南陽道中」（五三五）、汪遵「南陽」（六〇二）、李山甫「代孔明哭先主」（六四三）、胡曾「南陽」（六四七）、羅隱「籌筆驛」（六五七）、李中「感興」（七四七）、劉兼「中夏畫臥」（七六六）

【籌筆驛】

杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」（五二三）、李商隱「籌筆驛」（五三九）、殷潛之「題籌筆驛」（五四六）、薛逢「題籌筆驛」（五四八）、薛能「籌筆驛」（五六〇）、羅隱「籌筆驛」（六五七）、唐彥謙「興元沈氏莊」（六七七）

【永安】

杜甫「詠懷古跡五首（其四）」（三三〇）、竇常「謁諸葛武侯廟」（二七二）

【八陣圖・演陣圖】

杜甫「八陣圖」（二二九）、劉禹錫「觀八陣圖」（三三七）、薛逢「題籌筆驛」（五四八）

【劍閣】

杜甫「謁先主廟」(二二九)、李頻「送友人遊蜀」(五八八)

【渭(水)】

杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」(五三三)、

【瀘水】

溫庭筠「過五丈原」(五七八)、胡曾「瀘水」(六四七)

【五丈原】

溫庭筠「過五丈原」(五七八)、胡曾「五丈原」(六四七)

【褒斜】

杜牧「和野人殷潛之題籌筆驛十四韻」(五三三)、殷潛之「題籌筆驛」(五四六)

【襄陽】

楊炯「廣溪峽」(五〇)

【西陵】

李山甫「代孔明哭先主」(六四三)

【南蠻】

胡曾「草檄答南蠻有詠」(六四七)

【峨嵋】

韋莊「喻東軍」(六九六)

【隆中】

崔道融「過隆中」(七一四)

【注(15) 參照。】

(17) テキストは嘉靖本(上海古籍出版社、一九八〇年影印本)に據る。

【(18)】

テキストは、『古本小説集成』所收のものに據る。

【(19)】

『樂全集』卷三。テキストは『四庫全書』所收のものに據る。

【(20)】

『宋詩紀事』卷十。テキストは『四庫全書』所收のものに據る。

【(21)】

『跨鼈集』卷四。テキストは『四庫全書』所收のものに據る。

(22) 上記三首以外には、文彦博「題籌筆驛」、李新「題籌筆驛」、陸游「籌筆驛」がある。

(23) 蘇軾「懷賢閣」、陸薦「武侯祠」、陸游「感昔(二首之一)」、文天祥「和中齋韻」。

(24) テキストは『四庫全書』所收のものに據る。

(25) 『劍南詩稿』卷三。なお、テキストは『劍南詩稿校注』(上海古籍出版社、一九八五年排印本)に據る。

(26) テキストは『四部叢刊』所收のものに據る。

(27) 『中州集』卷二。テキストは『四部叢刊』所收のものに據る。

(28) テキストは『新雕注胡曾詠史詩』(『四部叢刊三編』所收)に據る。

(29) 金文京『三國志演義の世界』(東方書店、一九九三年)六一―六四頁などを參照。

(30) 『四分律行事鈔批』は『卍續藏經』卷六十七・六十八、『四分律行事鈔簡正記』は同卷六十八所收。

(31) 以下、『四分律行事鈔批』(テキストは前掲『卍續藏經』に據る)を用する。

注云、似劉氏重孔明者、劉備也。意三國時也。謂魏主曹丕都鄴、今相州是也、昔號魏都、吳主孫權都江寧、昔號吳都、劉備都蜀、昔號蜀都。

世號三都、鼎足而治。蜀有智將。姓諸葛、名高、字孔明、爲王所重。劉備每言曰、「寡人得孔明、如魚得水」。後乃劉備伐魏、孔明領兵入魏、魏國與蜀戰。諸葛高平時爲大將軍、善於謀策。魏家唯懼孔明、不敢前進。

孔明因致病垂死、語諸人曰、「主弱將強、爲彼所難。若知我死、必建彼我。吾死已後、可將一帋土、置我脚下、取鏡照我面」。言已氣絕。後依此計、乃將孔明置於營內、於幕圍之、劉家夜中領兵還歸蜀。彼魏國有善卜者、意轉判云、「此人未死。何以知之。塲土照鏡、故知未死」。遂不敢交戰。劉備退兵歸蜀。一月餘日、魏人方知尋住看之、唯見死人、軍兵盡散。故得免難者、孔明之策也。時人言曰、「死諸葛怖生仲達」。仲達は

魏家之將也、姓司馬、名仲達。亦云、「死諸葛走生仲達」。其孔明有志量、時人號爲臥龍、甚得劉氏敬重。

(32) テキストは『四部叢刊續編』所收のものに據る。

(33) テキストは『四庫全書』所收のものに據る。

(34) テキストは『國學基本叢書』所收の排印本に據る。